



エッセイ

海外で成長する子どもの「ことば」育て (2)

オーストラリアに移住したわたしと息子のこの一年

中野 千野*

© 2018. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. もう英語ペラペラですか

「ましゅう¹くん、もう英語ペラペラですか」

移住してから幾度となく聞かれた質問である。ちょうど一年前、母子でオーストラリアに移住し、5歳だった息子は6歳となり、1年生となった。親の立場から前出の質問に答えるならば、息子は質問者が期待するような「ペラペラ」にはなっていない。

国内外にかかわらず、多くの親たちには、英語環境に住めば英語は（わたしたちが経験したような苦労はしないで）自然と習得されるだろう、子どもは（言語習得が）早いから、（わたしたちが経験したような苦労はしないで）すぐに「ペラペラ」になるだろうといった英語のみならず言語習得に対する「願い」ともとれる「思い込み」がどこかにある。

昨年、息子との日常を描いたエッセイをジャーナルに初めて投稿した（中野，2017）。その拙稿を国内外の親としての友達（以下、親友達とする）や言語教育関係者に見てもらったが、「自分の子どもと重なった」、「読んでいて涙が止まらなかった」、「胸が熱くなった」、「わたしも育児日記つけてみようかなって思った」などのコメントをいただき、わたしたち親子の物語であったにもかかわらず、思いの外、反響が大きかったことに驚いた。

1 執筆者の息子の名前。

* ノースショア日本語学校 (okamotonakano0320@gmail.com)

人の移動が激しい時代においては、駐在家庭や国際結婚のみならず、誰もが複数言語環境で成長する子どもの親となる可能性を持ち合わせている。そこには、子どもをどう育てていけばいいのかという根本的な課題とともに、子どもの「ことば」もどのように育てていくのかという問いも突きつけられる。わたしたち親やそういった背景にある子どもに寄り添う実践者²は、その問いに悩み、試行錯誤しながら子どもと対峙していく。その過程で、とりわけ、わたしも含めて親たちは、環境さえ整えれば「ことば」の問題は解決するといった「特効薬」をしばしば求めがちで、それが効くという答えを得ると安心する。だからこそ、先述の「ましゅうくん、もう英語ペラペラですか」という質問が登場するのである。そしてその答えには、「ええ、子どもはやっぱり早いですね。もうほとんど問題なく学校生活が送れるようになったんですよ」という語りが期待されるのだろう。

2. 息子への言語療法

息子は、日本語で発話する際に、/k/,/t/,/s/の音の入れ替わりが起こるという問題を抱えていた。speech pathologist（言語聴覚士）によれば、息子はそれらの音の違いを100%認識しているものの、いざ発話するとなると前出の音の代替が生じているということだった。とりわけ、その現象は日本語で話す際に顕著に現れ、英語の場合にはなぜか現れないという珍しい事例であった。最も息子はまだ英語をあまり話さないで、日本語で話すときに現れるというのは納得できる。しかしながら、息子は日本で生まれ、5歳まで日本で育った。両親ともに日本語を母語として生活している。それにもかかわらず、息子は音の出し方をなぜか間違えて覚えてしまった。親であるわたしはどうしてもそのことが受け止められなかった。それでも目の前の現実、「あか」は「あた」となり、「森のごんべいさん」は「森のどんべいさん」となるのである。

5月から始まった息子の言語療法（以下、セラピーとする）は、とても興味深いものだった。セラピーは、二週間に一度、日本語と英語ができる speech pathologist が自宅にやってきて、一時間ほど行われた。その間、親であるわたしも一緒に参加し、その方法を学び、次のセラピーまで毎日息子とともに練習をするというものだった。

息子へのセラピーは、まず音の絵カードを使い、「かあー」と伸ばすような長母音の練習から「か」といった短母音の練習へと移っていった。その際に「ベロを後ろに引いて」といった指示を伴うが、息子は言われたときには出来ても、いざ一人で発音するとなると再び元に戻ってしまうということが続いた。そこで speech pathologist は、人差し指をクの字に曲げてあごの下に持ってくるように指示し、再び練習させた。すると信じ難いことに、息子の /k/ は /t/ と入れ替わることなく、明瞭な /k/ の音となって出てきたのである。これには、わたし自身がマジックにかかっ

2 本稿では、親、教師、研究者、支援者など子どものことばの教育に携わる者を指す。

てしまったかのような感じだった。今まで何度やってもできなかったのが、たった一つの動作で聞き取れる明瞭な発音になったのである。わたしは驚き以上に、嬉しさと感動で涙が止まらなかった。その後、息子は誰に促されるわけでもなく、/k/の入った音を発話するときやうまく発音できないときには、自身であごの下にクの字に曲げた指を持っていくようになった。自身で意識しているのだ。

日本語教師でもあるわたしは、この身体を使って意識化させる方法を日本語教育でもよく使ったなあなどと思いながら見ていた。たとえば、<場所>の「で」を導入する際に、「< place >で action verbs」といいながら<場所>の「で」の「で」時に、周りを囲むように両手を動かし、最後に「で」と上から押さえる動作をしつつ、教えていたのである。学生が「公園にサンドイッチを食べます」と言った際に、その手の動きをするだけで、自身で気づき、「で」と訂正した。指をクの字に曲げてあごの下にあてるというこのちょっとした動作は、息子の発話への意識をどれほど変えただろう。あのまま親子で解決の糸口を探っていたら、わたしは「『か』っていうときは、上あごの途中まで舌をひいてごらん」などと繰り返していただろう。問題の核を捉え、その方法を示し、気づきを促す、そして自身で解決への糸口を開いていけるように手助けをする。息子のセラピーに参加しながら、改めて「専門家」や「専門性」というものについて考えているわたしがいた。

息子のセラピーは、その後も進み、プログラムはわずか三か月で卒業となった。息子は、今ではあごの下に手をあてることもなくなった。

3. 子どもの学校選び

息子は、移住後、最初の二学期こそ日本人学校に通ったが、三学期目からは現地校に転校した。

日本人学校の国際学級は6年生までで、その後は現地校か日本人学級へ進むかの選択となる。いずれ現地校へ進学するのであれば、息子は翌年から1年生となるので、そのタイミングで現地校へ編入する方がよいと思われる、学校探しを始めようとしていた。

公立校の場合は、日本同様、通学区域（以下、学区とする）の問題がある。学区内の公立校であれば、ほぼ問題なく通うことができるが、学区外の学校に通うとなると、それなりの理由が必要となる。他方、私立校の場合は、特に「人気校」などは妊娠中からウエイティングリスト（以下、リストとする）に載せておくなどの準備をしなければ入れないといわれている。つまり、転校したいからといって、すぐに受け入れてもらえるとは限らないのである。わたしたちが住む学区内には、一学年に12クラスもあるというマンモス校一校のみである。息子は言語療法が必要な上、英語での授業はおろか、会話についていくのも難しいという状況であった。息子の内向的な性格を考えると、少人数制の日本人学校からいきなりマンモス校への転校は心身ともに負担が大きいだらうと思われた。息子の speech pathologist も同じ見解だった。そうすると、ほかの学

区へ転居するか、私立校への編入しかない。とりあえず、インターネットや現地の保護者から情報を集め、公立、私立校を含め5校ほどにレターを送った。そして承諾を得た学校から順に見学をさせてもらうことになった。

一校目は、居住地近くのカソリック系の私立校だった。わたしが住むマンションから歩いて10分ほどの近さにある。校長先生の話によれば、生徒の多くが外国に背景を持つ子どもたちで、中でも中国系の子どもが最も多いということだった。それゆえに、そのような子どもの受け入れには慣れているとのことだったが、現在のところ、これ以上の受け入れは難しいとの回答を得た。この学校は、このあたりに住み私立に通わせたい親、あるいは／そして、外国につながりを持つ親にとっては、近さという利便性に加え、English as an Additional Language (以下、EALとする) 学習者のためのクラスを併設していることから「人気校」であるらしかった。そのため、どうしても入学を希望する場合は洗礼を受け、できるだけ早くリストに載せてほしいとの説明を受けた。そのほか私立校二校を見学したが、一校は先述のカソリック校同様に既に空きがないということだった。空きがないということは、リストに載せて空きが出るまで待つということであるが、当然リスト順であるため、具体的にいつ入学可能となるかはわからない。そこで、学区外ではあるが全校生徒が400人程度という中規模な近隣学区の公立小学校を見学に行った。するとその場で「受け入れ可能」という回答を得たが、EALなどの特別支援はないということだった。とてもアットホームな小学校で、学校事務に日本語のできる人が勤務し、夫も私も対応を含めて好印象を持ったが、唯一特別支援がないことに不安を覚えていた。夫婦で悩んでいたところ、たまたまもう一校の私立校から空きが出たとの連絡を受け、親子ともにすぐさま面接を受けることになった。その学校には、EALクラスがあり、speech pathologistも常駐、図書館などの設備もかなり充実していた。様々なバックグラウンドの生徒を受け入れているということもあり、教育内容は一人ひとりの文脈に配慮したアクティビティ中心の教育展開であった。公共のバスを使っても比較的近く、息子もこの学校が気に入った様子で、受け入れてもらえることがとても有難かった。

4. いざ現地校へ

7月下旬、新しい学校で三学期目がスタートした。息子にとっては、海外への移住だけでも相当な負担だったに違いない。それにも増して、わずか半年で現地校に入れる運びとなり、わたしは息子に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。日本人学校では、さまざまな背景を持つ親子に出会い、友達もやっとできてきた。それにもかかわらず、またしても親の一方的な思いだけで息子を転校させてしまった。息子は、わたしたち夫婦の思いを感じてか、「新しい学校のほうがいい」と言ってくれた。親友達も「今は大変かもしれないけど、この先もオーストラリアで暮らすことを考えたら、その決断で、ましゅうくんにはよかったと思うよ」と後押ししてくれた。

わたしたち親子にとって、半年でも日本人学校に通ったことは非常に大きな意味があった。息子のみならず、わたしにもたくさんの親友達ができ、オーストラリアでの学校生活がどのように進み、親子でどのように学校生活に参加していけばよいのかということをおぼることができたからである。幸い、わたしたち親子が住む地域は、日本人学校に通わせている日系家族も多く住む。それゆえに日本人学校を離れても、習い事やプレイデート³などを通して会う機会も多かった。そのような状況も手伝って、予定外に早い転校となってしまったが、現地校へ移ることに迷いはなかった。移住して間もないわたしにとっては、現地の日系家族の存在は大きい。海外という「アウェイ」感の中で、子育てにおいて日本語が通じ、それに伴う規範を共有し、親の立場から理解を示し、助けてもらえることは何物にも代えがなかった。現在に限っていえば、何か困ったときに実際、頼りにできるのは日系の親友達だからである。

有難いことに、息子は新しい学校に嫌がることなく登校した。学校側は、英語がよく理解できない息子のために、リセス⁴や昼休みには、みさきちゃん（仮名）をバディーにつけてくれた。みさきちゃんは、駐在家庭の2年生の女兒である。オーストラリアに来る前はドイツに住んでいたという。ことばもわからないまま現地（ドイツ）の幼稚園に入り、なかなか友達もできず、ずっと不安な日々を過ごしたという。その経験もあってか、ある朝、みさきちゃんに会った時に、「いつもありがとうね」と声をかけると、「わたしも、ましゅうと同じだったよ。だからましゅうの気持ちがわかる」と話してくれた。みさきちゃんは、朝、登校し、授業が始まるまでの遊び時間や、リセス、昼休みなど、自分も遊びたいだろうに、度々息子の様子を見に来ては声かけをしてくれたり、いっしょに遊んでくれたりしていた。息子にとってもみさきちゃんの存在は大きかったようで、「きょうも、みさきちゃんがリセスの時にきてくれたんだよ」と嬉しそう話し、みさきちゃんのことを大好きなようだった。わたしは、みさきちゃんが自己の体験を振り返り、過去の自分の姿を現在の息子の姿に重ね、息子を言語面からサポートしていこうとする姿に驚かされた。そして、いつしかみさきちゃんのように息子も育ててもらいたいと思うようになった。息子に「みさきちゃんがない間は、どうしているの」と聞くと、「ひとりで遊んでる」、「ひとりでご飯食べる」といった返事が返ってきた。聞いているこちらが切なくなり、それからはランチボックスに短い手紙を入れるようにした。ランチの間に息子がわたしの手紙を読み、少しは元気が出たら、時間が潰せたらと、一方向的なわたしの思いから始めたのだが、「ママ、きょうはお手紙に何を書いたの」、「それは開けてのお楽しみだよ〜」といったように、息子はそれを喜び、楽しみにした。ところが一週間も経つと、急に息子は自分から「ママ、もうお手紙はいらない」と言い出した。「え、もういらないの？ほんとうにいいの？」と聞くと、「うん、もういらない。大丈夫」と平気な顔で言う。いらない理由が知りたくて、「え？じゃあ、お友達ができただけなの？」と聞くと、「ううん、出来てない。でももういらない」ということだった。心配だったが、本人がいらない

3 前もって親同士が日時と場所を決め、子ども同士を遊ばせること。

4 授業と授業の間の長い休み時間を指す。息子の学校では、午前中に一回リセスが設けられている。子どもたちはリセスにおやつを食べ、外で遊ぶことが多い。

いというので、しばらくは手紙無しで様子を見ることにした。

手紙を無しにした翌日、登校時にたまたまみさきちゃんにあった。すると「最近ね、ましゅうね、ほかの子と遊んでいるから、わたしはいらぬみたい。たぶん大丈夫」とにっこりしながら教えてくれた。息子の学校には、モンゴルからやってきたメンテナンス業務のマリア（仮名）がいる。彼女も息子と同じ年頃の男児の母親であり、2年前にオーストラリアに移住してきたという。自身の状況と重なるのか、息子が転校した当初からよく話しかけてくれた。そして親としてのわたしの気持ちを汲んでか、「休み時間に時々ましゅうを見かけるけど、最近は、ほかの子どもたちとも遊んでいるから、心配しなくても大丈夫よ（筆者訳）」と教えてくれた。マリアは、仕事の合間に息子を気にかけてくれているようだった。みさきちゃんとマリアのことばから息子が少しずつ学校に慣れていく様子が窺がえ、わたしの張り詰めていた気持ちも少しずつ解き放たれていくようだった。今でもみさきちゃんやマリアには感謝の気持ちでいっぱいである。

5. 「ことば」へのまなざし

手紙を無しにしてから、二週間が過ぎた頃、息子が目に涙をためて「ママ、ましゅくん⁵ね、ランチとかりセスの時に、マルコがましゅくに意地悪する」と訴えてきた。学級担任からも EAL 教師からも、息子が少しずつ学校に慣れてきているという話を聞いていたので、わたしはすっかり安心していった。息子の話では、マルコは（親の仕事関係で）南米から来ているクラスメイトの男児で、英語もよく理解し話せるが、EAL のクラスに来ているのだという。驚いたわたしは、「マルコがどんなことするの」と聞くと、「ランチが始まると、ましゅくんのランチボックスを持って行って砂場に隠したり、バースデーパーティーは、英語が話せる子どもしか、来ちゃダメっていうんだよう」と泣く。そういうことが何日も続いているそうである。わたしは「自分のものなんだから、返してって言いなさい」というと「言っても返してくれない」、「じゃあ、走って取り返せばいいじゃない」と提案したが、「マルコは足が速くて、ましゅくん、ついていけないんだよ」と返ってきた。やれやれと思いながら息子の話を聞いていたが、その一方で息子がそれだけの話を英語で理解していることに驚いた。息子は今なお英語をほとんど話さない。しかし聞く力は伸びてきていることがわかる。息子は、今は話し始めるために必要な言語情報を吸収している段階で、言語習得が進んでいないわけではない。これが第二言語習得理論でいうところの「沈黙期」(Krashen&Terrell,1983,p.35)だということを改めて認識した瞬間だった。とはいえ、息子がそういう課題に直面していることを親として無視するわけにもいかないので、息子からの一方的な話であることを前提として、担任教師と EAL 教師に相談してみた。すると程なくして、EAL の教師からマルコが息子に言ったことややったことを認め、反省しているというメールが来た。

5 息子が自分のことをいうときに使う呼称。

そして、リセスや昼休みも、教師や学校関係者など複数の目で息子を見守ってくれることになった。わたしは、教師たちのそのことばに安心しながらも、マルコのことを考えていた。息子は以前、「マルコはね、EALのクラスで本を読むとき、atとかtoとかしか読めないんだよ」と話したことがあった。わたしが「ほかのことばは、何で読まないの」と聞くと、「読むんだけど、なんか、ちがうことばで読むんだよ」という。わたしはマルコが親の仕事の関係で南米からきている話を思い出し、マルコがEALクラスにいる意味を考えた。息子がマルコの読みを「ほかのことばで読む」と言ったのは、マルコが英語を読むときに彼の「母語」(おそらくスペイン語かポルトガル語)の知識を応用して読んでいる可能性が高いこと⁶、生活言語は身につけていても、学習言語の習得という課題があるからなのだろうと推察した。さらに息子は、「ましゅくんは、本が緑のマークに変わったよ。でもマルコは、まだ黄色だったよ」と言っていた。息子の学校では、毎日多読用の薄い本を一冊持って帰ってくる。その本には、黄色からスタートし、次が緑というようにレベルごとに小さな丸いシールが貼られている。わたしは、マルコも息子と同じように海外からきて、ことばも文化も違う中で新しい学校に入り、いろいろと経験する中で一生懸命に生きているのだろうと想像した。それにもかかわらず、自身の「ことば」が英語読みになっていないことで、自身より英語ができない息子と同じEALのクラスに入れられ、多読用の本のレベルは黄色のままだった。マルコは、そんなことの一つ一つが許せなかったのではないだろうか。おそらく息子に言ったり、したりしていることは、マルコ自身も経験してきたことなのかもしれないと感じた。そうであるならば、マルコの気持ちも少しは理解できる気がした。その晩、わたしは息子に「マルコも、ましゅと一緒にいたかもしれないよ」と話した。息子は、ただ黙って聞いていた。

しばらくはマルコの息子への意地悪は影を潜めていたようだった。それでも息子の話によれば、「前みたいじゃないけど、マルコは時々意地悪してくるよ」ということらしかった。わたしが「そっか、じゃあ、そういう時はどうしているの」と聞くと、息子にも反撃の気持ちはあるようで「ましゅはね、無視するんだよ。でね、気持ちの中で<この〜>って言っている。でも、ましゅは絶対に悪いことばは言わない」と言った。この息子のことばに頼もしさと息子なりの成長を感じた。そして「ことば」を大切にしようとする姿勢、それはわたしが大事にしていることでもあり、息子がそれを意識し、言語行動をとっていることに驚いた。

6. 「ことば」への振り返り

一年経った現在、息子の話す「ことば」には、英語の単語やフレーズが混じるようになってきた。

6 第二言語習得理論では「負の転移」と呼ばれている。

学校の今学期のプロジェクトテーマは、『校庭にいる虫』である。虫好きの息子は、最近、ことあるごとに虫の話をしてくれるようになった。一昨日も「学校でね、ladybug と beetle を見つけたんだよ」という話から、学校で習った insects と bugs の違いについても教えてくれた。「ママ、insects は、からだは三（さん）parts ある。その三 parts の中の一個目は head, 二番目は thorax, 三 parts は、abdomen。insects は、六個の足しかない。そして絶対 antennae がある。bugs は、あの、三 parts なのに、四（よん）parts とか、六個の足なのに八（はっ）個の足がある。で、bugs は、絶対 antennae がない（本人の発話のまま）」といった具合にである。虫のからだの部分の名称は、授業で習ったものをそのまま英語で覚えているのだろう。その後も日本語にすることはなかった。その後、見つけた虫はどうしたのかと聞くと、もう面倒くさくなったのか「I don't know」で済ませてしまった。話の途中で時々、誰かの真似をしているのか、大袈裟に「Oh! No」とジェスチャーつきで言ってみたりもするようになった。このような状況もあってか、息子は自身で「日本語」に危機を感じているらしかった。

先日、日本人学校のお友達から誕生日祝いをいただいたので、そのお礼の手紙を書こうということになった。ところが、そこにはいざ書こうとして「ひらがな」が思い出せなくなっている息子がいた。焦る息子は、「ママ、ましゅくん、日本語忘れちゃったよ〜」と叫んでいた。わたしも日々の忙しさに追われ、息子が読む、聞く、話すが出来ているのと、毎週土曜校に通わせている安心感で、ひらがなやかたかなを書くといったことからはこのところすっかり遠のいていた。この経験から、子どもは新しいことを吸収することに抵抗が少ない分、忘れる時は半年でも簡単に忘れてしまうことがわかる。日本人学校に通わせていた昨年の二学期間、毎日一コマずつでも「日本語」の授業があったことは、とても大きな意味を持っていたのである。

それからしばらくたったある夜のことで、いつものように読み聞かせをして「おやすみ」と布団をかけていると、ふと息子が「ましゅくん、土曜日まで学校行くの、大変なんだよなあ」と呟いた。そこでわたしは、「そっかあ、土曜校、大変だったら無理して行かなくてもいいんだよ」と答えると、息子は「うーん、でも行かなかったらね、ましゅくん、日本語忘れちゃうんだよ。そうしたら、日本人なのに日本語書けないみたいなの」と苦笑いしながら答えたのである。「そっか、ましゅくん、日本人なんだ」と聞くと、急に真面目な顔になり、「ううん、ましゅくん、今はオーストラリア人になったんだよ」と返してきた。そこで「ふうん、そうなんだね。オーストラリア人になったんだね。いつからなったんだろう」と返すと、「やっぱり違うなあ。ましゅくんは、地球人でーす」と笑っていった。息子の中での「～人」という定義は曖昧で、国境や国籍という概念ではなく、英語を話す人を「オーストラリア人」と呼んでいるらしかった。

これら一連の出来事は、5歳で渡豪し、今は6歳となった息子の心身の成長を感じる出来事でもあった。息子は日本にいた時の感覚とは異なる「アウェイ」を感じる中で、自身のアイデンティティや自身の話す「ことば」に向き合い、自らどうすればよいかを考え始めている。一年前には、このように息子が自身の「ことば」の運用や学びを振り返って話すといったことはなかった。ところがオーストラリアに移住して一年が経ち、さまざまな言語や異なる文化背景を持つ子

どもたちと日々接していく中で、息子は自身で自己をまなざす「もう一人の自分」を登場させていたのである。この息子の「ことば」への振り返りは、わたしに、バイリンガルの子どもがモノリンガルの子どもよりも客観的に自身の言語使用や言語学習について振り返るメタ言語意識が高い (Cummins & Gulutsan, 1974 ほか) という研究結果を彷彿とさせる一方で、息子の心身の成長も感じさせた。すなわち、息子の「ことば」への振り返りは、幼児期から学童期へと移り変わる中で、心身の発達とともに生じたとも考えられるのからである。そうであるならば、子どもの「ことば」育てには、成長・発達の過程の中で立ち現れてくる心身の変化という面にも注意を払い、考慮していく必要があるだろう。

7. この一年から見えてきたもの

海を越え、複数言語環境の中で始めた息子との「ことば」育てという営みも一年が過ぎた。この一年を振り返って見えてきたものとは何だろうか。

「ことば」育てという営みは、わたしだけで、あるいは息子だけで成り立つものではない。さまざまな言語や異なる文化背景を持つ人々と日常生活を営む中で「アウェイ」を感じつつ、時の流れとともに紡ぎ出されていく経験そのものにあつた。その経験を振り返ることで次の言語行動を創っていたように思う。

息子の場合であれば、5歳から6歳になり、その成長過程で自己をまなざす「もう一人の自分」を登場させ、土曜校へ行く意味を見出し、使う「ことば」を選び、クラスメイトに対応していた。親であるわたしもまた、このエッセイを書くことによって自身の中に「もう一人の自分」を登場させていた。そして、その過程で息子とのやりとりや出来事を思い出し、息子の紡ぐ「ことば」への思いを知り、アイデンティティへの向き合い方、学びの姿勢を窺がい知った。そうすることで、わたしは初めて息子の成長に向き合い、息子を冷静にまなざすことができたように思う。日々の日常生活では、仕事と子育てで精一杯で、息子と紡ぐ物語の一つひとつを振り返る余裕はない。そうまでしてもわたしたち夫婦が選んだ道は、息子をオーストラリアで育てることだった。「ことば」を学ぶことだけが目的であれば、日本にいても可能であろう。しかし「アウェイ」を肌で感じるからこそ、経験する一つひとつに常に揺れ動く自身の葛藤や戸惑いが見えてくる。それが見えてくるからこそ、そこでの「ことば」の選択や自らの立ち位置というものに敏感になり、それをまなざす「もう一人の自分」が登場するのではないだろうか。

この一年から見えてきたもの、それは「アウェイ」を肌で感じつつ、親子の中に登場してきた「もう一人の自分」という存在である。時の流れとともに経験する出来事の一つひとつや、それにとともなう心身の成長という変化を「もう一人の自分」がまなざす。この「もう一人の自分」と織り成す物語への探求は、親子でこれからも続いていくことだろう。わたしはそれらを大事にしながら、息子と、そしてこのエッセイの読者と共有しながら生きていきたい。

文献

中野千野 (2017). 海外で成長する子どもの「ことば」育て——オーストラリアに移住したわたしと息子の日常から『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』8, 33-44. http://gsjal.jp/childforum/journal_08.html

Cummins, J., & Gulutsan, M. (1974). Some Effects of Bilingualism on Cognitive Functioning. In S.T. Carey. (ED.), *Bilingualism, Biculturalism and Education* (pp. 129-136). Edmonton, Canada: University of Alberta.

Krashen, S.D., & Terrell, T. (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.